

マルコによる福音書 13 章 28 節～37 節

2018 年 6 月 28 日

古本 靖久

1、聖歌 53 番 「イエスのしもべ 主のおしえに」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 89 ページ）

4、テキストの位置

今月で、マルコによる福音書 13 章が終わります。今日の内容も先月に引き続き、「世の終わり」についてのことです。

マルコ福音書が書かれた時代、人々はイエス様が再び来られるという期待と同時に、

恐れも抱いていました。迫害の中、いつになったらイエス様が来てくれるのかという希望も大きかったようです。ではイエス様が十字架の前に語った「終末」とは、どのようなことだったのでしょうか。

エルサレムにて	火曜日	13:1-8	神殿の崩壊と終末
		13:9-13	弾圧のとき
		13:14-27	終わりの日のこと①
	13:28-37	終わりの日のこと②	
水曜日	14:1-2	イエス殺害計画	
	14:3-9	埋葬準備	
	14:10-11	ユダの思い	



5、節ごとに

◆終わりの日のこと②（いちじくの木教え）

13:28 「いちじくの木から（この）教え（たとえ）を学びなさい。（その）枝が柔らかくなり、葉が伸びる（出てくる）と、（あなたがたは）夏の（が）近づいたことが分かる（を知る）。

イエス様はいちじくの木から、たとえを語られます。いちじくの木はイエス様がエルサレムに入城した 11 章にも登場します。そのときの木は実をつけていないことで、イエス様に呪われました。ここでは「いちじく」＝「イスラエル」という説明をしましたが、この箇所では特にイスラエルの人をいちじくにたとえているわけではないようです。

いちじくは夏に収穫を迎えます。「収穫」は旧約聖書の中では「裁き」という意味でも用いられています。

鎌を入れよ、刈り入れの時は熟した。来て踏みつぶせ 酒ぶねは満ち、搾り場は溢れている。彼らの悪は大きい。裁きの谷には、おびたしい群衆がいる。主の日が裁きの谷に近づく。
(ヨエル書 4 章 13～14 節)

13:29 （そして）それと同じように、あなたがたは（も）、これらのことが起こるのを見たら、人の子（彼）が戸口に近づいていると悟り（知り）なさい。

「これらのこと」というのは先月出て来た 24～27 節のことです。すなわち天体が消滅することと、人の子が来臨することです。しかしそんなことが起こってから急いで身構えてみても、時すでに遅しということなのでしょう。

つまり終末が来る前にどんな兆候がみられるのかが、ここで言いたいことではないのです。もうすぐ終末だと騒ぎ立てることなどないとイエス様は言われているのです。

13:30 はっきり言っておく（アーメン、わたしはあなたがたに言う）。これらのことがみな起こるまでは、この時代（世）は決して滅びない（過ぎ去ることがない）。

イエス様は 9 章 1 節で「はっきり言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる」と言われました。その言葉を言い換えたようにも聞こえます。

この世が過ぎ去るとは、消滅することを意味します。13 章全体で、イエス様は「この世は簡単には終わらない」と言われているように思います。

13:31 天地は滅びる（過ぎ去るだろう）が、わたしの言葉は（が）決して滅びない（過ぎ去ることはない）。」

旧約聖書には、このような希望の預言が書かれています。

草は枯れ、花はしぼむが わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。(イザヤ 40 章 8 節)

天に向かって目を上げ 下に広がる地を見渡せ。天が煙のように消え、地が衣のように朽ち地に住む者もまた、ぶよのように死に果ててもわたしの救いはとこしえに続き わたしの恵みの業が絶えることはない。(イザヤ 51 章 6 節)



マルコ福音書が書かれた当時、キリスト者はあらゆる困難と危機に立たされていました。このイエス様の言葉は、彼らに慰めを与えていたことでしょう。そしてその慰めは、2000年経った現代の教会に対しても語られています。

たとえ被造物が消滅しても、イエス様の言葉は消滅することがない。その約束は、イエス様を信じる人たちにとって大きな勇気を与えてくれるものなのです。

<前半の箇所から>

一見するとこの箇所は、「滅びに対する警告」と感じられます。しかし 13 章全体にも言えることですが、すべての言葉は「希望」の下にまとめられているように感じます。

信仰を持つことによって、命の危険にさらされ、家族ともバラバラにされてしまう。2000年前だけではなく、数百年前の日本でも起こっていたことです。そのときに人々は、何を頼りに生きていたのでしょうか。

それは、「言葉は廃れない」ということです。イエス様の言葉である福音は、何があろうとも消え失せることはない。実際イエス様の言葉は、2000年以上も人々の間に生き続けています。福音書が読まれるとき、礼拝堂の真ん中にイエス様の言葉が響き、わたしたちはその言葉によって日々生かされているのです。

その希望を持つようにと、イエス様はわたしたちに語り掛けているのではないのでしょうか。

◆終わりの日のこと②（目を覚ましていなさい）

13:32 「その日、その時（について）は、だれも知らない。（天にいる）天使たちも子も知らない。父だけがご存じである（知っている）。

「その日」という言い方は、旧約聖書の「主の日」という言葉に起源を持ちます。旧約では、主の日は終末論的な意味で用いられることが多いです。たとえばアモス書 5 章 18 節には「裁きの日」という小見出しがつけられ、「災いだ、主の日を待ち望む者は。主の日はお前たちにとって何か。それは闇であって、光ではない」と書かれます。

またイザヤ書 2 章 12 節には、「万軍の主の日が臨む すべて誇る者と傲慢な者に すべて高ぶる者に——彼らは低くされる——」とあります。

ここでもイエス様は、終末がいつ来るかなどと騒ぎ立てるのは、無意味だからやめるようにと伝えます。なぜならそのことは、父である神さましか知らないのだからと。

つまり子であるイエス様すら知らないのです。キリスト教が伝わる中で、この表現がまずいと感じた人たちもいたようです。イエス様は神の子なのだから、すべてご存じのはず。三位一体の神ならば、知らないはずがないと。そこで後世の写本の中には、「子も」という部分が削除されたものもあります。

しかしゲツセマネの祈りの場面などを思い起こしてみても、イエス様だから何でもご存じなのだという考えは当てはまらないように思います。



13:33 気をつけて、（なさい。）目を覚まして（眠らないで）いなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分から（知ら）ないからである。

この節の「眠らないで」だけ、34、35、37 節に出てくる「目を覚まして」という動詞と違う語が使われています。意味はほとんど変わらないのですが、訳詞分けてみました。意味は「眠気を捕らえてやっつける」というニュアンスです。

再臨の時期についての情報は、イエス様ですらわかりません。ただその時は近いということを知らされているだけです。いつも眠らずに、準備しておきなさいとイエス様は言われます。しかしそのようなことが可能なのでしょうか。

13:34 それは、ちょうど、家を後に（離れ）旅に出る人が、（自分の）僕たちに（それぞれ）仕事を割り当て（与え）て責任を持たせ（与え）、門番には目を覚ましているように、言いつけて（命じて）おくようなものだ。

僕たちは、自分たちに与えられた任務を知っていますが、主人がいつ帰ってくるかはわかりません。もし自分が僕の立場だったらどうでしょうか。何時に帰ってくるということが分かっていたなら、その時間の直前だけ必死に頑張るでしょう。でも帰ってこないかもしれないと思ったとたん、気を抜いてしまうかもしれません。

このたとえを、教会の状況に当てはめて考えることもできるでしょう。家の主人であるイエスは旅に出る、つまり昇天されて、不在となります。僕たち、あるいは門番である教会の信徒は、主人の突然の帰宅（再臨）に備えて常に目を覚まし続けなければならないということになります。

では教会の信徒は何をしながら待つべきでしょうか。祈り、福音を証しする。いろいろな責任を与えられているように思います。

13:35 だから、（あなたがたは）目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って（いつ）来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方（朝）か、あなたがたには分からない（知らない）からである。

聖書は、いつ主人が返ってくるかわからないと繰り返します。どうでもよい、何をしてもよい時間など、ないということでしょうか。常に緊張感をもって、信仰生活を生き抜きなさいと言われてるようにも聞こえます。

しかし反面、忠実な僕とは、主人に与えられた任務を落ち着いてこなす人のことです。託されたことに忠実であれば、主人がいつ帰ってこようと、関係ないはずです。

13:36 主人（彼）が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない（たりしないように）。

わたしは今、眠っていないでしょうか。問いかけてみたいと思います。今イエス様が現れたとしたら、わたしはどうなってしまうのだろうか。考えてみたいと思います。



13:37 あなたがたに言うことは、すべての人（々）に言うのだ。（あなたがたは）目を覚ましていなさい。」

この話を、イエス様はペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレの4人の弟子たちにしました。しかしペトロ、ヤコブ、ヨハネはゲツセマネの園でイエス様が祈っている間、寝てしまいました。

そしてイエス様は、この話はすべての人々に言うのだと言われます。すべての人の中には、わたしたちも含まれているのです。

<今日の箇所から>

「目を覚ます」、その言葉を聞いて、わたしは二つの場面を思い起こしていました。

一つはある聖書の研究発表会での出来事です。その日の前の夜、深夜にサッカーの試合を見ていて寝不足だったわたしは、ある講演を聞きに行きました。テーマは「初期シナゴグの発掘について」。

幼稚園の都合で遅刻したため、会場につくと一番前の席しか空いていませんでした。そこに座り、「この石はこういう用途で使われ、このような広さのシナゴグは…」という説明を受けている中、わたしは必死で「眠ってはいけない、眠ってはいけない」と心の中で叫んでいました。

もう一つはクリスマスイブのことです。「サンタさんがやってくる!」、そのことを信じて、子どもたちはクッキーやミルク、ニンジン置いて待ち構えます。何とかサンタさんに直接「ありがとう」を言いたい。その気持ちで必死に目をこすり、起きていようと頑張ります。

わたしたちにとって、イエス様が再び来られるのを待ちつつ「目を覚ます」のは、前者のように苦痛をともなうことでしょうか。それとも後者のように、ワクワク、ドキドキしながら頑張りを続けることでしょうか。

忠実な僕は、主人との間に信頼関係があったと思います。その中で、主人の顔を思い浮かべながら、自分に与えられたことを忠実にこなす。そこには、苦痛などないのかもしれませんが。わたしたちもイエス様との関係の中で、喜びのうちに待つことができればと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は7月26日(木)10時半からです。「イエス殺害計画、埋葬準備、ユダの思い」(マルコ14:1~11)について学んでいきます。